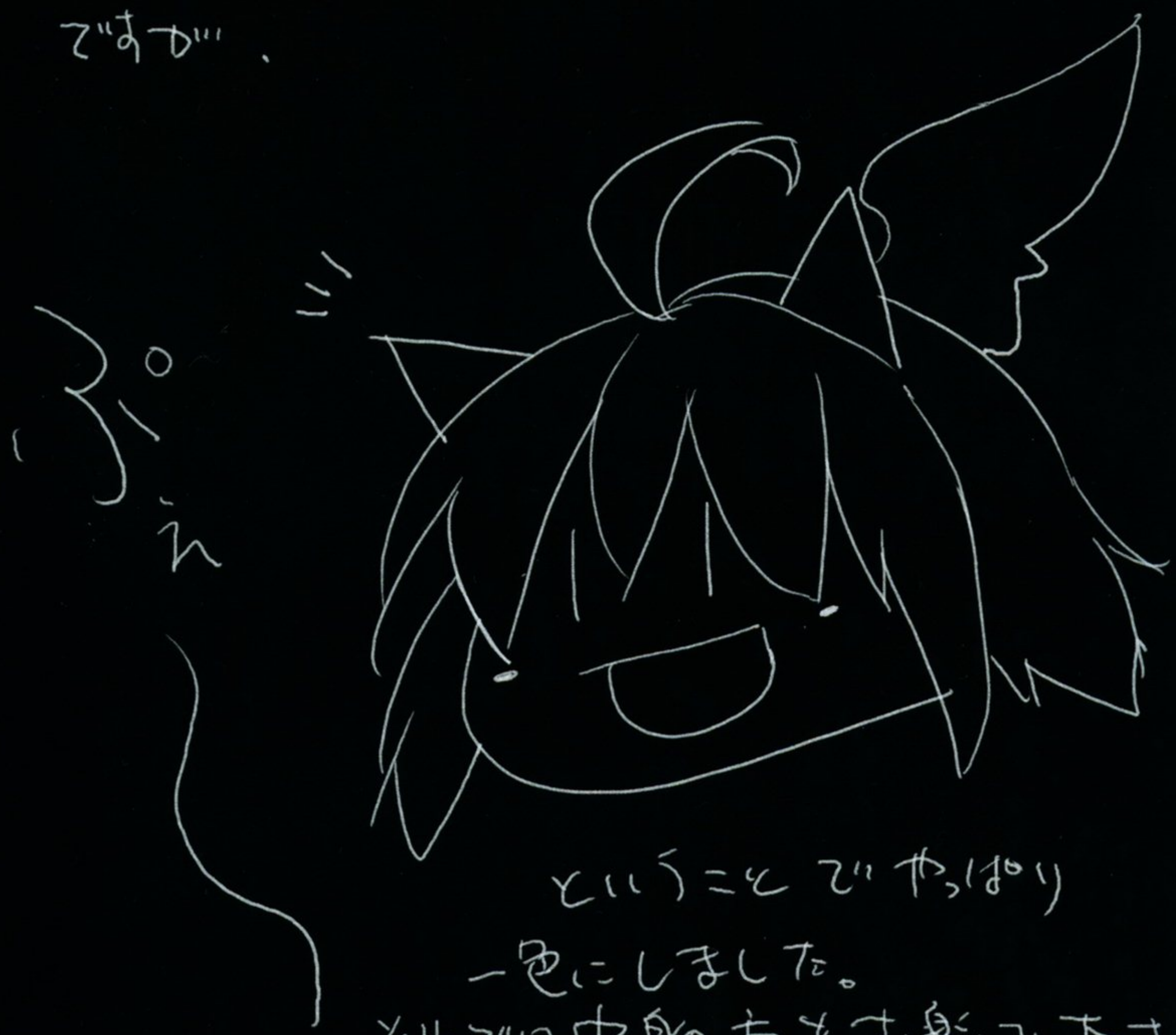
東方妖恋談
参
R-18

どーも白帆です。お手に取って頂き
ありがとうございます。
読みにくいですね。すみません。読ま
なくていいです(´・ρ・)
相変らずページ毎にキャラが
別人と化していますが、気にしないで
頂けますと幸いです。
あと、前回はけーねの髪が一部青かったの
ですが、



ということでやっぱり
一色にしました。
それでは中身の方をお楽しみ下さい!!

あれから数日が経った。慧音は一度も店に顔を出すことはなく、霖之助も自分から慧音に会おうとはしなかった。二人の間にあった関係など、まるで端から無かったかのように、それでも二人の心には深く刻まれている。互いの顔が、声が、仕草が、まるで目の前で見ているかのように鮮明に、だからこそ、二人はいつまでも自分の中のわだかまりに首を項垂れるしかなかった。

「霖之助……いる、か？」

昼の半ばごろ、香霖堂に一人の少女が訪れた。白い長髪に赤いリボン、サスペンダーに真っ赤なモンペを穿いた少女。藤原　妹紅であった。妹紅は店を一通り見渡したが、人影はおろか気配すらしなかった。霖之助に会いに来た妹紅は、店主が帰って来るまで店の中で待つ事にしたらしい。カウンターの椅子を引き、そこに座り込むと頬杖を突きながら溜息を吐いた。

「妹紅さん？」

「うわぁっ!?」

突然の声に驚いた妹紅は、危うく椅子ごと後ろに倒れそうになるのを何とか持ちこたえ、その声の主を見た。香霖堂の入り口に立っていたのは、緑色の髪が鮮やかな、山の上の巫女だった。

「やっぱり妹紅さん!! お久しぶりです!! 以前は本当にお世話になりました!!」

そう言って深々と頭を下げる巫女。はて……妹紅は一瞬考え、以前に永遠亭への道案内をしたことを思い出した。

「えーあー、ああ。そうか。前に輝夜の所まで案内した……えっと、東風谷　早苗だったっけ？」

「はい、覚えていてくれて光栄です、妹紅さん」

早苗は店の中に入ると、店内を見渡した。相変わらず散らかっている店内は、前に来た時と比べると少しばかりその度が増しているように思えた。そして。

「あれ……霖之助さんはご不在ですか？」

「ああ、だから私もここで待っているんだ。ちょっと用事があるんでな」

「そうですか。私も少し用事があったんですよ。霖之助さん、上手くやっているかなって」

嬉々として話す早苗、しかし妹紅はその言葉に少し引っ掛かった。

「上手くって……何を？」

早苗は妹紅と向かい合うように、カウンターを挟んで椅子に座った。

「ここだけの話、霖之助さん、好きな人がいるんですね。それで、上手くいっているかなって」

「好きな人って……慧音の事か？」

早苗はキョトンとした表情になり、妹紅を見た。

「おや、知っていたんですか？」

「ああ、慧音本人からも聞いた。霖之助は慧音の事が好きだし、慧音もまた霖之助の事が好きだった。だけど……」

そこまで言って、妹紅は黙ってしまった。その先の事実を、見えていなかった真実を、無意識に目を逸らしてしまった『慧音の気持ち』を、口にするのが怖かった。

「だけど……私が、二人の仲を裂いてしまった……」

「え……それはどういう……」

妹紅は俯きながら、暫く口を閉ざしていた。話す勇気を振り絞っているかのように、そして、決心がついたのかゆっくりと口を開いた。

「慧音は私の数少ない友人で、そして理解者だった。そんな彼女を駄目な人間にしたくなかったんだ。だから私は霖之助を無理矢理に襲って、慧音を諦めるようにと説得した。それに、慧音の友人である私とそういった関係になってしまえばきっと、霖之助は慧音に顔向けができなくなる。そう考えた」

「……」

妹紅は拳をカウンターに叩きつけた。ビクっと早苗の体が震える。

「その結果がこれだ。私は間違っていたのか？　取り返しのつかない事をしてしまったのか？　でも、慧音だけは駄目な女にしたくなかった。現に、私がこうして駄目な女になってしまったんだ。今日だって、何かとかこつけて霖之助を襲うつもりで来たんだから……。……でも、慧音がこうならなくて良かった半面、慧音の好きだった霖之助にこうやってすり寄って、私、本当に駄目な奴だ……」

「妹紅さん……あなたも、霖之助さんが……」

慧音の為に行った行為が裏目に出て、しかもその慧音が想いを寄せていた霖之助を求めてしまうようになってしまった。そんな自分が許せなくて、そして苦しかった。

「私も……霖之助の事が好きになってしまったんだ……」

どうして霖之助の事を好きになってしまったのか、そんなのわかる訳がない。ただ、私は慧音も霖之助も好きで、本来私はそんな二人が幸せになるならばと二人の仲を見守るべきなのだ。

「妹紅さん。私思うんです。今ならまだ遅くはないんじゃないですか？　今ならまだ、そう、妹紅さん次第で二人を結ばせる事が出来るんじゃないですか？」

「そう……なのかな。私に、またあの二人の笑顔を取り戻せるのかな……」

「妹紅さん次第ですよ」

早苗はきっぱりとそう言った。妹紅はゆっくりと項垂れた首をあげ、そして頷いた。

「さて、それじゃあ、私は出直して来るとしましょうか。それでは妹紅さん、頑張ってくださいねっ」

早苗は立ち上がると、微笑みながら妹紅に手を振り、香霖堂を後にした。静かな時間が流れた。霖之助はいつ帰ってくるのか、それまでに覚悟はできるのか、妹紅はいつもの澄ました表情ではいるものの、内心では今までに無いほど緊張していた。

?
誤報全書
漢和大全
新装版日本語辞典

そして、日が少し傾き始めたころ、香霖堂の扉が開いた。
「な、妹紅？　どうしたんだ、ずっと待ってたのか？」
妹紅の存在に意表を突かれたのは、香霖堂店主である森近 霖之助に他ならなかった。妹紅は霖之助が帰ってきたと分かるや否や、椅子を蹴倒さん勢いで立ち上がり、有無を言わさず霖之助の手を引いて店を飛び出た。
「な、な、どうしたんだ妹紅‼ おお落ち着けっ‼」
「いいからっ、来てっ‼」
そのまま二人は森を抜けて、人里に近い田圃道で妹紅は足を止めた。霖之助は半ば妹紅に引きずられるようにしながらも何とか付いてきており、妹紅の後ろで激しく酸素を欲していた。
「霖之助、話したい事があるんだ……」
「はぁ……はぁ……な、何を……？」
妹紅は霖之助が回復するのを待ち、話しだした。
「私、色々と間違っていた。本来だったら、そばから見守ってあげるのは私である筈なのに、慧音を幸せにするのは霖之助で、霖之助と結ばれるのは慧音のはずなのに、それを私の自分勝手で崩してしまった。私は慧音が好きで、だから彼女には幸せになってほしくって、そして駄目な女にはなってほしくなかった。でも、私……」
妹紅は一歩踏み出し、霖之助の顔を両手で押さえて無理矢理に唇を塞いだ。橙の夕日に照らされ、地面に伸びた二人の影が重なる。霖之助の目が驚きで見開く。妹紅は霖之助の口の中に舌を潜り込ませ、霖之助の舌と絡み合わせた。
「んっ……はぁっ、んふっ……ちゅぱ……あむ……。私、霖之助の事、好きになっちゃったから……、駄目な女に……んっ、ちゅぷ……っはぁ、だから、霖之助にも幸せになってほしい……んっ、ちゅぱ……はぁ、んんっ……」
妹紅は霖之助からそっと口を離すと、頬を赤く染めながら霖之助を見つめた。
「だから、これが最後の口付けだ。霖之助は慧音を幸せにして、霖之助自身にも幸せになってもらわないといけないから……だから、早く慧音の所に行ってやってくれ。里の寺子屋で泣いていると思うから……」
「妹紅……済まない、僕みたいな甲斐性なしの為に……」
「勘違いするな、そうなってくれる方が私が嬉しいからだ。それと、慧音に私の事は言わないでくれ。落ち着いたら、私から話すから」
そう言って、妹紅は霖之助に背を向けた。背後から、霖之助の走って行く足音が聞こえ、遠ざかってゆき、やがて聞こえなくなった。妹紅は振り返って小さくなった霖之助の背を見つめながら、頬にそっと一筋の涙をこぼした。
「これでいいんだ……これで……」
そして、森の方向に向きなおった妹紅の視界に、緑色の髪が映った。森の木の影、早苗が安心したような表情で隠れていた。
「何やってるんだ？」
「わひゃぁっ!? え、あ、ああは言ったもののやっぱり少し心配で……でも、するだけ無駄だったみたいですね」
早苗は木陰から出て来ると妹紅に向かってほほ笑んだ。妹紅はむすくれた表情でおもむろに早苗の首に腕を回し、強く抱きよせた。そして早苗の意思を完璧に無視して妹紅は歩きだした。
「今日は飲むぞ‼ これが飲まずにいられるかってんだ‼ 早苗も付き合え‼」
「え、わ、私、お酒はちょっと……」
「問答無用っ‼」
「ひーん」

里にある寺子屋の前、霖之助はそっと扉をノックした。しばらくした後、中から足音が聞こえ、引き戸が開かれた。
「はーい、どちらさまで……り、霖之助さん……っ!?」
扉を開いた慧音は、驚いたような表情で凍り付いたかのように固まった。そしてその表情は段々と紅潮していき、勢い良く引き戸は閉められた。扉の向こうからすぐさま慌てたような声が聞こえる。
「なっ、ななんで霖之助さんがここにいるんだ!? だだだって私、霖之助さんに……」
「落ち着いてくれ慧音。取り敢えず、向き合って話がしたいんだ、開けてくれないか？」
「す、すまない、ちょっと、顔を合わせられそうにない。できれば、このままで頼む……」
霖之助は溜息をつくと、引き戸に寄りかかった。慧音は鳴りやまない心臓の鼓動を押さえるかのように、両手を胸の前にあてながら扉に寄りかかった。引き戸を隔てたまま、霖之助は話し始めた。この鼓動が霖之助さんに聞こえてしまっているのではないだろうか。そう思うと、鼓動はより高鳴った。
「あの時、君の為にと言って僕は慧音の思いを受け止めなかった。でも、結果的にはそれで君を傷付ける事になってしまったのが事実だ。……本当に、すまない」
「な、何を謝る必要が……。あれは霖之助さんが私の事を想ってくれての事だったんだから、嬉しかったよ……」
「分かりやすい嘘だ。どんな理由であれ、僕は君のことを傷つけてしまった。それが嬉しい訳がないだろう」
「そ、そんなこと……」
「それに、たとえ嬉しかったとしてもだ。僕は男としてまず間違ったことを言っていた……僕と付き合って慧音が幸せになる、ならないじゃないんだ」
霖之助が扉を開けると、慧音が振り向いた。目から頬へと涙が伝っている。霖之助はそっと手を差し伸べてその涙を拭き取ると、そのまま慧音を抱き寄せ、両手で包み込んだ。
「僕が、慧音を幸せにする。絶対だ……」
「……ああ。絶対に、幸せにしてもらうぞ」
慧音は霖之助の胸に顔を埋め、溢れ出る涙が服に滲み込んだ。霖之助は慧音の頭をそっと抱き抱えたまま、ずっとそうしていた。

二人は寺子屋の教室にいた。木製の机が並ぶ畳の部屋で、二人は抱き合いながら唇を重ねた。霖之助はそのまま慧音を畳の上に押し倒し、覆いかぶさるようにして慧音を見下ろした。

「……」

「どうしたの、霖之助さん。……そんな、茫然とした表情をして……」

「……いや、綺麗だな……と」

「なっ……！」

慧音は顔を赤く染め、霖之助から顔を背けた。しかし、霖之助は無理やり顔を自分に向けさせ、慧音と自分の唇を重ね合わせると、そのまま全身を慧音に覆いかぶせた。手と手を絡め、足と足を絡め、に互いに感じる相手の体温を布越しに確認するように。慧音の歯を割って口内へと侵入してくる舌に、慧音は戸惑いながら恐る恐る自分の舌と絡み合わせる。ぎこちない舌の動きに、緊張しているんだなと霖之助は内心笑っていたが。

「んぅ、ちゅぱ……はぁ、んっ、むぐぅ……はむっ、むぅ……ぷはっ」

長い口付けから口を離すと、二人の間に糸が垂れ、緊張の所為か慧音は呼吸速度も速まっていた。

「り、霖之助さん……？　あの、ちょ……ひぁぁっ、んはぁぁ……」

霖之助はそのまま舌を慧音の首筋へと這わせると、まるで吸血鬼のようにそこを甘噛したりしながら、重点的に愛撫した。手が慧音の背筋を服の上からなぞる様に下ろされる。ビクンと慧音の身体が反応し、微かに喘ぎ声が漏れ出していた。

「あ、ふ……はぁ……。霖之助さん……」

「霖之助でいいよ。なんだかそれだとよそよそしい」

「んひゃぁっ、り、霖之助……そこばっかり舐めちゃ……んんっ、だめぇ……」

「ん？　だめなのかい？」

霖之助は意地悪くそこを重点的に舐め続け、そのたびに慧音の身体がビクンと反応した。霖之助はそのまま慧音の胸元のリボンを外し、襟を広げて胸を露わにした。

「や、ぁ……ふぁ、な、何をするんだ？　んっ……ひゃぁぁっ……!!」

首筋から顔を離した霖之助は、慧音の胸の突起を指で軽く摘まんだ。慧音から悲鳴にも似た声が漏れ出し、慧音は固く目をつむりながらじわじわと寄せて来る快楽に耐えようとした。だが、乳房をしゃぶり付かれ、慧音は背筋を反らしながら我慢していた声を漏らしてしまった。

「ふにゅうっ、ううぅん……り、霖之助の、いじわるぅ……」

「ふふっ、すまない。慧音が可愛くってついな」

霖之助はそう言いながらも慧音の胸を揉み扱くのをやめようとはしなかった。それどころかどんどん激しくなっていく霖之助の手つきに、慧音は快感を抑えきれずに声を上げるばかりだった。

「ひぁ……あぁぅ、気持ちいい、気持ちいいのぉ……!! 霖之助の、ひぅっ……手の中で擦れて……ひっ、あぁぁ!!」

慧音は足をがくがくと震わせ、ショーツは既に濡れて染みになっていた。最愛の人の目の前で何の抵抗もなく快感に溺れる事に恥ずかしさを覚え、慧音はきゅっと目を閉じた。霖之助はそんな反応の慧音が気に入ったのか、右手をそっとスカートの中に忍び込ませた。

「え……ひうっ、あぁ……だめっ、そこは……ひゃん!!」

濡れたショーツに浮き上がった割れ目を指でなぞると、慧音の身体がビクンと震えた。霖之助はそのままスカートをたくしあげ、慧音の綺麗な足が露わになる。慧音は恥ずかしそうにスカートを戻そうとするも、いとも容易く霖之助に阻まれてしまう。

「綺麗だよ、慧音……」

「うう……そんな在り来たりな言葉で褒められたって……」

「嬉しくないのかい？」

「……うぅ」

慧音は一瞬言い淀み、

「嬉しい……です……」

さらに恥ずかしそうに答えた。霖之助は満足そうな笑みを浮かべ、顔を慧音の秘部に近付けると、ショーツを膝の辺りまでおろした。溢れ出た愛液が糸を引いている。そのまま割れ目に舌を這わせると、可愛らしい悲鳴が上がった。だが霖之助は構わずに溢れ出て来る愛液を掬う様に舐め上げる。

「凄いね、舐めても舐めてもどんどん溢れ出てくるよ。やっぱり半獣だから精力も並みじゃないのかな？」

はっ
はっ
パンよ…

「り、霖之助だって、半妖じゃないか……ひんっ！　そういう事なら……お互い様だろ……」
「だな、もしかしたら、そういう共通点に惹かれあったのかも知れない」
「馬鹿……言うな、んっ、私は……霖之助が好きなんだ……。霖之助の……全部が……私は好きで好きで、愛おしくて堪らなくて……ひゃぁっ！　だから……今こうしている事がすごく幸せなんだ……んっ、んあっ‼　あぁっ、や、イッ……やあぁぁ‼」
霖之助の舌が慧音の秘部の中に入り込むと、慧音は身を捩じらせながら快感に震えた。襞や肉壁を舐められる度に慧音は身悶え、そんな慧音を霖之助は半ば無理やりに押さえながら愛撫を続けた。舌で中をかき回し、溢れ出た愛液を激しく啜り、そうする内に慧音の息も声も段々と激しさを増していった。
「あぁぁっ‼　ひぃっ、だめぇ‼　感じ……ちゃう……ひっ、はあぁぁ‼　霖之助、私……もうイッちゃう、イッちゃうのぉ……‼　んあぁっ、ふあぁぁぁぁ‼」
慧音の身体が跳ね上がったかと思うと、秘部から大量の愛液が溢れ出した。慧音は通り過ぎた快楽に身体をぐったりとさせ、肩で息をしながら虚ろに天井を見上げた。秘部はまだ痙攣したかのようにひくつき、そのたびに残りの愛液が絞り出されるように溢れた。
「はっ、ふぅ……んっ、んはぁ……。もう、霖之助の意地悪……次は……私の番だ、な」

慧音は上半身だけを起き上がらせると、今度は逆に霖之助を畳に押し倒した。そして這い蹲る様な姿勢になると、霖之助のズボンを脱がせた。霖之助の肉棒が露わとなり、慧音はその肉棒を胸で挟み、そしてぎこちなくではあるがゆっくりと胸を動かしながら肉棒を扱き始めた。時には互い違いにしたり、きつく締め上げるようにしたりしながら。
「んっ、どうだ……霖之助？　気持ちいいだろう？　〝ぱいずり〟という技法らしいぞ」
「あ、ああ……。すごく気持ちいいよ。それにしても、何処でこんな技を覚えたんだい？」
「えっと……霖之助の家にあった、今風の春画に……」
「み、見たのか……あれを……」
慧音は硬くなった肉棒を胸で挟んだまま、先端を口に含んだ。肉棒をもごもごと咥えたまま胸で竿を扱くと、その柔らかく刺激的な感触に霖之助は呻き声をあげた。聳え立った肉棒からは僅かに先走りが溢れ出し、口の中に微かな苦みが広がると慧音は眉をひそめた。少し苦い……けれど、これが霖之助の味……なんだ。
「んっ、っはぁ……これ、乳首が擦れて結構気持ちいい……かも。ちゅぱ、じゅる……んっ……」
慧音は互い違いになる様に胸を上下させ、同時に肉棒に音を立てながら吸いついた。溢れ出た先走りを全て吸い取り、さらに先端を口の中で舐めまわした。もっと……霖之助を気持ちよくさせたい……。慧音は胸で肉棒をきつく絞り上げるように挟み込み、緩めると今度は激しく肉棒を挟んだまま胸を動かした。
「慧音……思ったよりもやばい、これ……もう限界かもしれない……」
「んっ、出してくれて構わない……うんっ‼　霖之助の精子を、私にたくさん与えてくれ……」
慧音は肉棒から口を離すと、胸で肉棒を押しつぶすように挟み、そのまま上半身全体を使って扱き始めた。竿の裏を直接に刺激され、肉棒は今にも射精せんとばかりにびくびくと震えた。しかしそれを拒否するかのように、慧音は胸で強く肉棒を押さえつけながらも、その行為を止めようとはしなかった。
「うっ、んっ……乳首が、動くたびに擦れて……はんっ！　あぁ、これだけでイってしまいそうなくらいだ……んっ‼　ああっ、はぅ……気持ちいいっ‼」
「くっ、慧音……出すぞ‼」
「ふぁ、ひゃああっ……‼　凄い……霖之助の、いっぱい出た……」
限界を超え、肉棒の先端から溢れ出た精液は慧音の胸や顔を汚した。慧音は肉棒をそっと口に咥え、まだ僅かに溢れ出ている精液を啜った。
「ん……ちゅぱ、ちぅ……。んふ、凄い、私の顔や胸が霖之助のでべとべとだ。ちゅ……んっ、れろ、はむっ……うん、これくらいでいいかな」

はーっ♪
ビグ
ビグ
はぁ…
はぁ…

慧音は肉棒から口を離すと、立ち上がり、スカートを下ろした。秘部は赤くなり、溢れ出た愛液が太股を伝って足元まで延びていた。慧音は恥ずかしそうに手をもじもじとさせながら、霖之助を見つめた。

「あのな、霖之助。私、あれからずっと霖之助の事を想いながら、その……自慰……を、してたんだ。でも、どうしても最後の最後で絶頂に至らなかった。その後が怖かったんだ。霖之助が本当に私の事を好きかどうかが不安で、どうしてもイく事ができなかった……。なあ、霖之助……」

慧音は畳に寝転がると、仰向けになり、両手で足を押さえて股を開いた。

「まだまだ満たされないんだ……霖之助のを、挿入れてくれ……。深く、激しく、壊れちゃうくらいに私を犯してくれ……私を、愛してくれ……」

霖之助は再び硬くなった肉棒の先端を慧音の秘部に添え、

「……いくぞ、慧音」

それをぐいと押し込んだ。肉棒が秘部を貫き、そのまま根元まで膣内へと入って行った。カリが肉壁を引っ掻き、慧音は内側から来た大きな快楽に身体を大きくのけ反らせた。

「ひぁ、んっ、ああぁぁぁぁぁぁぁぁ!! ああ……あふぅ、ふぁぁ……」

慧音は入れられただけで絶頂に達した。身体がビクンと震える度に肉棒の形が分かるくらいに膣内がきつく締まる。霖之助は肉棒を半分ほど引き抜くと、すぐにまた根元まで押し込んだ。そのたびに慧音は快感に身体を跳ね上がらせ、喘ぎ声が響き渡る。

「ひっ、あぁ!! んっ、気持ちいいっ、霖之助のお○んぽ、私の中でごりごりってなってぇ……はぅぅ、んっ、ダメ、なの……ひゃぁっ!! 私……教師なのにっ、寺子屋で霖之助に犯されて……んぁぁっ!! か、感じちゃってる……いやらしい、変態だ……ひぅん!!」

霖之助が腰を動かすたびに、水音が響き渡り、慧音の秘部からは泡立った愛液が間から漏れ出ていた。腰に感じる快感に、慧音は身体を捩じらせながら目をギュっと閉じた。その目からは快感による涙が溢れ、粗く熱い吐息は段々と激しくなっていった。全身が汗ばんでいくのが見て取れる。

「んあぁぁっ、はぁぅ……んっ、霖之助っ、わ、私……凄く気持ちいいの、止まらなくて……っ!! り、霖之助……は?」

「ああ、僕も気持ちいいよ。慧音の中、温かくて……凄くいい」

愛液が潤滑油の役割を果たし、霖之助はどんどん乱暴に激しく、慧音の膣へと肉棒を突き立てた。きつい膣内を滑らかに出入りし、その度に肉壁が刺激され、慧音の全身へと快感が伝う。慧音は腕を霖之助の背に回し、強く抱きしめ、霖之助は慧音の背を支え、そのまま彼女の中を激しく掻き回した。

「あぅ、んあぁっ!! だ、だめぇ……ずっとこうしてほしくて、わ、私……気持ちよすぎて……ああぁっ!! も、もう、イっちゃ……うっ!!」

「慧音っ、僕ももう出そうだ……っ!!」

「だ、して……私の中に全部っ……!!」

快感に膣内が締め付けられ、狭くなった膣を霖之助のそれが貫くたびに、慧音は全身を伝う快楽に声を荒げた。限界点へと達しようとした時、慧音は霖之助と唇を重ねた。肉棒から精が放たれ、膣内へと溢れ出た。慧音は目に涙を浮かべ、霖之助と唇を重ねたまま、絶頂へと達した。抱き締める力が一層強まり、二人は舌を絡め合わせながらいつまでも抱きあっていた。

霖之助は慧音を連れて、とある場所へと向かった。これは勘であったが、恐らくここであろうと、霖之助は睨んでいた。暗い道に浮かぶ、一つの赤い提灯。漂う甘い蒲焼の香りが、暖簾の向こう側から漂ってくる。その暖簾を捲ると、

「いらっしゃ……って、おや、霖之助さんでしたか」

ミスティア・ローレライが、八目鰻を焼いている。その横では朱鷺子がお酒の入った瓶を持ちながら、霖之助の登場に茫然としており、

「あ、霖之助、と、慧音……」

先客……もとい、霖之助の目当ての人物。妹紅が酒の入ったガラスコップを片手に、既に席に座っていた。その横ではどういう訳か早苗が顔を真っ赤にしながらカウンターに項垂れていた。

「さあさ、二人とも座って座って。飲み物は何にします？」

「あ、じゃあ僕は『びゃくれん』で」

「じゃあ私は『495年の胸さわぎ』をお願いしょう」

ミスティアが注文を取り、二人が答える。慧音は横の席の妹紅に向き直ると、微笑みながら挨拶をした。その笑顔に、妹紅は罪悪感を覚えた。

「なんだ、妹紅らしくもない。いつもの明るさは何処に行ったんだ？」

慧音はまだ何も知らない。そしてそれを知らなきゃいけないし、私が教えなきゃいけない。

「慧音、妹紅から君に話があるそうだ。重要な話だ」

霖之助が慧音に言うと、慧音は極めてまじめな顔つきになった。妹紅は意を決し、慧音を店の外まで呼び出した。八目鰻屋から少し離れた暗がりまで歩き、妹紅は慧音に振り返った。

「それで、なんだい、真面目な話って。霖之助も知っているようだったし、」

「……慧音、私はお前を悲しませることをした」

慧音は黙って頷く。

「私は……慧音の為だと言いながら、慧音の気持ちを考えないで、霖之助に慧音と付き合わないでくれと勝手な事を言った」

慧音の表情が驚きに変わる。妹紅はさらに、霖之助に罪悪感故に慧音と付き合わないように、無理矢理に襲ったこと、そして自分も霖之助を好きになってしまった事を告げた。

「ごめん……ごめんなさい……。私、慧音にとてもひどい事をした……ごめんなさい……」

「……それが、私の為を思ってくれていての事なら、私はお前を恨みはしない。お前だって女の子なんだ、好きになってしまうのも仕方ない。……ただ、本当の事を言ってくれてありがとうな、妹紅」

そう言い、慧音はそっと妹紅を抱きしめた。肩に顔を埋めて嗚咽を漏らす妹紅を、慧音はずっと抱きしめ続けた。

「幻想郷はぁー、じょーしきに囚われちゃあー、いけないんれすよぉー!? 一夫多妻制!! おーいにけっこーじゃあー、ありませんかぁーっ!!」

落ち着きを取り戻した妹紅を連れ、慧音が店に戻ると、酔いがかなり回っているのだろう、早苗は呂律の回らない声で叫んでいた。皆茫然としている中、妹紅だけが焦った風に早苗に問いかけた。

「さ、早苗？　何を言っているんだ……？」

「妹紅さんは慧音さんが好きでぇー、霖之助さんの事も好きなんれす!! 慧音さんと霖之助さんはぁー、妹紅さんの事が好きじゃないんですか!? 妹紅さんだけ一人ぼっちれふか!?」

「お、おい早苗、やめろってば……」

妹紅が慌てふためきながら早苗の口をふさぎ、早苗は手をバタバタと振り回しながらもがきだした。まだ慣れていない酒を妹紅に無理矢理飲まされ、すっかり自我を失っている。

「ふむ……確かに、それじゃあ妹紅が救われないな」

しかし、酔った早苗の発言にもあくまで真面目に、慧音は考え始めた。こうなってはいよいよ妹紅も焦るしかない。慧音の肩をがしっと掴み、妹紅はまっすぐに慧音の目を見た。

「頼む、頼むからもうやめてくれ!! 一夫多妻制？　そんなの駄目に決まっているだろう!! 二人の中を邪魔するなんて許されないんだ、もう同じ過ちは繰り返さないぞ!!」

「……ふふ、妹紅は優しいんだな」

慧音はそっと囁くと、妹紅の首の後ろに手を回し、そのまま妹紅を抱き寄せた。そして、そのまま妹紅の唇を塞いだ。妹紅は何が起きたのか理解できていない様子で、ただ目をぱちくりとさせながらされるがままになっていた。

「ふふ、なあ霖之助。一度身体を重ねた相手だ、しっかり責任を取ってあげないとな？」

唇を離し、慧音は微笑みながら霖之助に問いかけた。頬を掻きながら小さく頷く霖之助に、未だに現状を理解していない妹紅。そして、

「か、かかかか身体を重ね、ねねねねね……っ!! あふぅ……」

「ちょっ、朱鷺子？　朱鷺子ー!?」

「あっはははは!! ひゅーひゅー!! 熱いねお三方っ!!」

混沌とした店内で、慧音は妹紅を抱きしめながら霖之助を向いた。嬉しそうに微笑む慧音に、ああ、もしかしたら僕はこれからとんでもない生活を送る事になるのかもしれないと思いながら、霖之助は二人を纏めて抱きしめた。

「まあなんだ、二人ともこれからよろしくな」

「ああ、三人一緒だ。いつまでもな」

「は、恥ずかしい……」

Happy ending…？

奥付

お初にお目にかかります。そうでない方は、お久しぶりでございます。去年の今頃は秘封倶楽部の小説を売ってたりしてたんですから感慨深いものですね。どうも私です。文章担当の八月一日宮です。いつだって八月一日宮なんです。

という訳で、サークル『ICBM』が贈る東方project fan bookこれが五冊目となります。『東方妖恋談 参』を手に取って頂き誠にありがとうございます。

無事に『東方妖恋談』シリーズが完結して、まあ良かったんですかねぇ。ここまで、会帆さん含め様々な方々から支えられてきました。いやもう嬉しいですよ。感謝です。

まだまだ色々と至らない私ですが、まあこれからもなんか本とか出すかもしれないし出さないかもしれないので、何かまたよくわからないサークルが居るぞ的な感覚でお付き合い下さいませ。

では、いずれまた相見える日まで。

・サークル/ICBM

・発行者/会帆、八月一日宮

・HP/http://cmpanus.blog68.fc2.com/

・題/東方妖恋談 参

・印刷/有限会社ねこのしっぽ 様

・発刊/2011/3/13　第八回博麗神社例大祭

東方妖恋談参

R-18

東方project fan book